第２回新たな産後育児支援の在り方検討委員会

議事録（要旨）

名称	第２回新たな産後育児支援の在り方検討委員会		
日時	平成 25 年 12 月 3 日（火） 15 時 30 分～17 時 30 分	場所	県庁防災新館４階　411
出席者	山縣委員　市川委員　藤巻委員　小島委員 松本委員　鈴木委員　内藤委員　白倉委員（代理者出席） 小林委員　花輪委員　古屋委員　山下委員　堀岡委員		

I.　次第

１．　開会

２．　あいさつ

３．　議事

　１）山梨県助産師会の取り組みについて

　　・「母子支援の活動報告と今後の課題」

　　・母親による体験談

　２）第１回検討委員会での質問事項への回答

　３）新たな産後支援やその背景に関する整理

　４）具体的な構想について

　５）意見交換

　６）その他

４．　閉会

II.　配布資料

資料１　母子支援の活動報告と今後の課題

資料２　第１回検討委員会での質問事項への回答等

資料３　新たな産後支援やその背景に関する整理

資料４　具体的な産後育児支援の構想

III.　議事内容等

３．協議事項

事務局から配布資料の確認

（1）　山梨県助産師会の取り組みについて

・母子支援の活動報告と今後の課題

資料１により、小島委員から説明

・母親による体験談１

今日、お話させていただくことが、急遽決まったため、お話する内容がまとまっておらず、うまくお話できないかもしれないが、自分なりに思ったことを話したいと思う。

10/16 に男児を出産した。今、生後１月半となった。妊娠中から切迫流産となったり、5 年間ほど不妊の期間があったりしたことから、元気な赤ちゃんが産みたいと思って、県外出身ではあるが、里帰りはせずに県内の病院で出産することにした。

出産は普通分娩であったが、病院は 5 日で退院という流れで、特にトラブルがなければ退院ということだった。入院中から母乳がうまく出なかった。入院中にいろいろと指導は受けたが、自分としては、不安のまま 5 日目に退院した。

退院した日も、母乳がうまく出ないということは考えていなかったので、ミルクグッズとか用意していなかった。必要なものが入院しているうちに分かった。他にも会陰切開の傷が痛くて椅子に座ることができず、円座のクッションが必要だった。ミルクについてもお湯を沸かすポットが必要だった。その日に、赤ちゃんが泣いている中で、必死の思いで夫と二人で買い物をした。

里帰りをしておらず、夫も仕事が不規則で忙しいこともあって、夕方には仕事に行ってしまい、帰ってきた日には一人で泣きながらミルクをあげていたことを思い出している。

最初に躓いたこと、困ったことは、母乳がうまくいかなかったこと。今、どこの病院でも母乳育児が推進しているところが多く、妊娠中も母乳でと言われていたので、自分でも母乳が絶対だと思っていた。まさか出てこないとは思わなかった。分泌が悪かったこともあったし、出血などで乳首が痛いような状態で赤ちゃんに吸われるたびに激痛があった。しかし、母乳を分泌させるためには、赤ちゃんに頻繁に吸わせなければ出ないと言われ、とても痛くて、泣いているような状態であったが、必死に授乳させていた。拷問のよ

うな毎日であった。
　母乳だけでは足りないので、ミルクを足しながらやっていた。混合栄養というやり方でやっていたが、自分としては、母乳中心にやっていきたいと思っていた。そのため、夫や義理の両親、周りの人などの何気ない一言でとても傷ついた。赤ちゃんが泣いたときに、「おなかすいていんじゃない」、「おっぱいが足りていないのでは」という何の気なしに言っている言葉に傷ついた。
　母乳がいいのは十分に分かっているが、混合栄養でもよい、母乳が出ない人もいるということにも目を向けてもらいたいと思った。また、本などをみても混合栄養の進め方が書かれている場合が少ないので、どうやってミルクの量を調整したらいいかもわからないまま過ごしていた。
　出産した病院でも母乳外来があり、それに参加したが、４、５人のお母さんと助産師さん１人で、４対１とか５対１で１時間枠で行うが、一人ひとりにかけてもらう時間があまりない印象だった。３回通って指導を受けたが、３回目の母乳外来で母乳が吸えていませんと言われてしまった。こんなに痛い思いをしているのに、吸えていないと言われたショックは大きかった。しかし、産後ひと月近く経っていたので、母乳外来は今回でおしまいといわれた。
　この先どうしたらいいのか、誰に話を聞いて、アドバイスを受けたらいいのか途方に暮れてしまった。また、そのような状態であるのに、母乳外来の再診がないと言われ、その病院に不信感を持ってしまった。
　その時、妊娠中に、昭和町の母親学級に出た時に、講義の中で、小島助産師が母乳外来の紹介をしていたのを思い出して、早速電話をしたところ、すぐに診てもらえるということで駆け込むような感じで行ってみた。そこでは、１対１で１時間、しっかりと診てもらえた。母乳のことから、母乳以外でも困ったことがないかなど、いろいろなことについて話を聞いてもらえた。すごく気持ちが楽になった。
　１回行っただけで母乳がうまくいくようになるわけではないが、自分の困っている気持ちを共感し、認め、自分の立場に立って話を聞いてもらえた。また、自分が知らない情報を与えてもらった。これによって助かったし、救われた。そして元気が出た。
　料金は安いわけではないが、それだけの価値はあったかなと思う。
　日常生活について、退院した途端にガラッと生活のスタイルが変わった。予想をしていたが、これほど変わるのかというほど変わった。常にやることに追われている毎日。授乳もおっぱいをあげて、げっぷをさせて、寝かすまで１時間かかる。さらに哺乳瓶を洗って、消毒をする。おむつを替えて。泣いたら抱っこをして、あやしてと、常に何かをやらなければならない状態。

その合間に家事をしている。
　退院直後は貧血があって、ぐったりしていた。もともと腰痛もあって、ベルトをして過ごしている。
　そんな日々であるため、休もうにも休めない。夫の仕事が不規則で、夜勤もあるので、一人でいることも多い。そのため、ちょっと見ててと抱っこしていてもらえる人がいないことが大きい。
　常に赤ちゃんと 24 時間一緒にいて、多少泣いても放っておいていいのかもしれないが、かわいそうだと思って、そうもいかず、泣いていないのに、泣いているような気がしてしまうこともある。そのため、食事もゆっくりすることもできず、赤ちゃんを抱っこしたまま、立って食事をしたこともある。
　話し相手もいないので、気分がふさぎこんでしまう。思うように家事が進まないのでいらいらする。夫にあたって、泣いてしまうこともある。気分転換に出かけるとしても、身支度をして、ミルクなどの荷物を準備して、赤ちゃんをチャイルドシートに乗せて、車に乗って、と出かけるのも大変で、簡単なことではないと分かった。
　そのような状態で限界だったので、1 週間くらい里帰りをした。両親だと少し見ててという気軽さが全然違う。身体も休めたし、気持ちも楽になった。短期間の里帰りではあったが、気持ちを入れ替えることができたのでよかったと思う。
　片道 3 時間かかるので気軽にはできないので、山梨でも気軽に預けることができる場所があればと思う。市町村がやっているファミリー・サポートなどもあるが、料金もあるし、こんなことを頼んでもいいのかという戸惑いがあり、利用したことがない。気軽に頼めるところがあればと思う。
　同じ年ごろ子どもを持つお母さんと会う機会があまりない。市町村の学級とかで同じようなお母さんと話をすることができるが、昭和町の場合は２か月おきで頻繁ではなく、その場で話した程度ですぐに仲良くなれるわけでもない。気軽に情報交換できるような場がもう少し頻繁にあると良い思う。そういうものがないので、本やインターネットで情報収集するが、様々なことが言われているので、情報に振り回されてしまい、混乱してしまう。
　産婦人科や行政が様々なサービスを行っているが、電話するのも、行くのも勇気がいる。こんなことでいいのか、と考え、一歩が踏み出せないお母さんは多いと思う。昭和町では、助産師から電話がかかってくるサービスがあるが、そういったサービスは非常にありがたい。
　３か月か４か月してくれば、育児のペースがつかめて来て、自分の気持ちにも余裕がでると思うが、今はまだ１月半で大変なので、それまでの間に気軽に受けることができるサービスが充実していけばと思う。

・**母親による体験談２**

自分は４３歳の時に第１子となる男の子を出産した。今、５歳になる。先日、スーパーで買い物をしていたら声をかけられた。見ると、ベビーマッサージで一緒だったお母さんだった。手を取り合って、２人で泣いてしまった。彼女は看護師をしており、職場復帰もしている。しかし、５年ぶりにあって、泣き崩れてしまうほど、大変な思いをして育児をしてきた。それだけ強烈なものであった。

自分の場合は両親が亡くなっており、一人っ子だったため、出産して退院後は、少し夫の実家にお世話になったが、間もなく自宅に戻って、育児に奮闘することとなった。

夫は週のほとんどが出張で不在だった。必死だった。おっぱいをやっても、おむつを替えても泣きやまない。寝てもくれない。一日中ずっと泣きっぱなしで、体中があちこち痛くて、おっぱいは引きちぎれそうだった。眠ることも、食べることも、トイレに行くこともできず、だんだん追い詰められていった。

夫が週末に帰ってきても、ご飯の支度どころか、家の中は荒れっぱなしだった。それどころか自分のご飯を食べたのかも、何日顔を洗っていないのかもわからないような状態だった。限界だった。

出産するまでは、バリバリと仕事をしており、徹夜をしたことも何度もあった。しかし、育児は、孤独で、終わりがなく、やり場がない。言葉であらわせれない。赤ちゃんポストのこの子を預けて、１時間でいいからゆっくりと横になりたいと思ったこともあった。

甲府市から助産師さんが２回訪問してくれたが、そのような状況であったので、記憶にない。いっぱい、いっぱいだった。

ネットには様々な情報があふれ、本もあったが、どうしてよいかわからない状態だった。その中で、先ほども紹介があった助産師さんの電話相談がふと目についた。ギリギリの時間に電話してくる人が多いというお話であったが、自分もそうだった。こんなことで電話してよいのか、自分がおかしいのではないか、と考えてしまった。

そこで、「子どもには何枚着せればいいんでしょうか？」というようなことを聞いたが、質問は何でもよかった。人の声が聞きたい。もう何日もしゃべっていない。外に出ていない。もう死んでしまいたい。しかし、そんなことは言えないので。

しかし、その助産師の方は悟ってくれて、時間は過ぎていたが、涙声でしゃべっていた。助産師の方は、お助け助産師を使って明日行くから、それまで待っていて、と言ってくれた。今夜、何するかわからない、と思わず言っ

たところ、救急車でも何でも呼んでいいから。明日行くから。今夜がんばれし。と言ってくれた。

翌日、助産師の方が来てくれた時には、張り詰めたものがあふれ出て、号泣したことが忘れられない。苦しみの中で、すがるようにかけた電話だった。

もしあの時に、ここにさえ相談すればどうにかなるとあらかじめ知っていれば、全然違ったと思う。あの夜に、死んでしまいたいと本当に思った。あの時に駆け込みのシェルターがあったらどれだけ救われたかと思う。

あの苦しみのまま、自分の子がかわいいと思えないまま、育児を続けていたかと思うとぞっとする。専門家が寄り添って様々なケアをしてくれることが、これらかずっと続いて行く育児に大きく影響していくと本当に思う。

最近、ベビーマッサージとかお母さんが参加するサークルとか、支援センターのイベントとか、充実していると思う。そこに出ていけるお母さんはいいと思う。でも、自分みたいに家から出ることができず、ギリギリの精神状態でやっているという人を何人も知っている。

同級生で、ちょっと前に双子の男の子を産んで、同じように夫が長期出張中で不在のお母さんを知っている。子どもがノロウィルスにかかり、何度も吐いて、シーツなどをありったけのものを出しても、洗濯する余裕もなく、お風呂場に投げて、もう限界だ、という話を聞いた。孤独にやっているお母さんは少なくないと思う。

そういったお母さんたちが２人目を生みたいと思うかというと、もうこりごり、またはじめからやるのか、もう２度とあんな思いは、と考えるのではないか。自分もそのように思った。もうとても耐えられないと思った。仕事の１００倍大変だった。５年経ってようやくかわいいな、もう１人欲しいなと思うようになったが、もう来年は５０歳。

少子化について、行政では、いろいろな取り組みを行っている。もちろん、現在の医療費や教育費の経済的サポートは必要だと思うが、それだけではなく、お母さんたちがまた生みたい、育てたいと思うようにならないとダメなのではないか。

育児は１人ではなく、皆でやるものと言われたが、その皆とは誰だろうか。近所の人のなのか、親戚なのか。友達なのか。自分について考えてみると、育児を一緒にやる皆とは、難しい。そういった意味でも、この産後ケアセンターというものの存在、役割は計り知れないと思う。

産婦人科では、退院後は、母乳外来を一回くらいやって、あとは終わりというイメージ。その後、何かがあった場合に、どこに行って、何をして、誰に、ということは皆困っていると思う。ここに行けば、ここに相談すればというのが、１か所ある。ここに行けば何かしてもらえる。お金がかかっても、

それは必要だと思う。
　育児は、子どもと関わることができるということは、とても素晴らしくて、かけがえのないものだと思う。しかし、かけがえのないものというのは、一歩間違うとギリギリの状態になる。虐待や母親の鬱とかは特別なものではないと思う。自分自身も半狂乱でやっていた時期もある。
　この産後ケアセンターというものを検討されているということ聞いた時に、欲しいと思った。この瞬間も困っているお母さんたちがたくさんいると思う。そのようなお母さんたちのよりどころとなるような場所ができることを祈っている。

＜山縣座長＞
　現場でのお話を聞かせていただき感謝する。
　いろいろなサポートについて、こんなことをやっているということを聞くだけでは、特に男性は経験がなくてぱっと来ないが、現場の生の声を聞かせていただくことで、助産師会での取り組みや今考えている新たな産後支援の必要性を感じることができたと思う。

（２）　第１回検討委員会での質問事項への回答
資料２により、堀岡委員から説明

＜花輪委員＞
　各市町村における産前・産後支援の取組の現状であるが、調査を回答した立場から補足すると、独自となると、電話相談など難しいところであるが、何もやっていないわけではない。
　甲府市を含めた各市町村では、この時期の母親を対象とするといった限定をせずに、相談が来るので、可能な限り対応をしている。お助け訪問助産師のように当日訪問することは難しいかもしれないが、電話での対応であれば、1時間とか2時間とか相談に応じている。
　浸透してくれば状況はかわるかもしれないが、そういった対応の中で、ここからは有料になるので、といったような誘導は難しいところがある。実際に母乳のことや育児のことでお助け訪問助産師を紹介し、市町村では対応しきれないようなきめ細かなところについて対応してもらっている場合もある。
　今後の整理として、現場としてどのように進めていけばいいのかが課題となる。現場の職員も、利用者となるお母さん方も。経済的に不安定だからという観点から割り切れるものでもないので。そのあたりも議論できると良い

と思う。

＜山縣座長＞
この質問項目については、答え方によって異なってくる部分があると思う。例えば、山梨市の場合には、30 年来、周産期に 5 回訪問していると聞いているが、独自にやっている事業と捉えることができる。全ての市町村の状況を完全に把握しているわけではないが、ほとんどの市町村で法定以外の部分で横出しの部分をやっているということを知っている。そういった意味では、全くやっていないということではないと理解している。
その一方で、有料、無料を含めて、適切な対応をしていくためには、どういった人をどういう風に振り分け、サービスを提供していくかという点につながるのではないか。

＜堀岡委員＞
花輪委員の指摘については、今回の資料を整理する中で悩んだ点である。様々な相談の電話がかかってくるので、電話相談をやっていないということではない。訪問支援にしても、新生児訪問の横出しという形で実施していただいており、実態として育児支援とどこがちがうのかという議論はあると認識している。今回の結果については、あくまでも「育児支援としてやっているか」という観点からまとめたものと理解していただきたい。

（３） 新たな産後支援やその背景に関する整理
資料３により、堀岡委員から説明

＜松本委員＞
すばらしいことが動きつつあると、感動してお話をお聞きしていた。
ちびっこはうすの活動においても、地域づくり、地域との連携やボランティアの方との子育て支援といった観点から、いろいろな活動を行ってきた。そのなかで拠点があるということは、利用者である母親にとって非常に重要となる。また、地域にとっても安心となり、活動の幅を広げることができる、といったことが経験的にわかってきた。
はじめの方で説明されていた柔軟な対応ということも重要で、いろいろな活動をする人が混ざり合ってくるので、活動を幅広く、深く進めるためにも、共有できる部分をきちんと押さえ、いろいろな団体の意見を尊重して、すり合わせを行って、より良いものに活動を進めていくことがポイントになると思う。

＜鈴木委員＞

母子保健活動において、乳幼児への関わり、子育て支援、最近では妊婦への関わり合いも行っている。しかし、若い母親とつながる場という点で、産後ケアセンターがあると良いと思う。母親が地域に帰ってからも声かけがしやすくなり、母親からも声をかけてもらえるのではないか。つながりや広がりが出るのではないかと期待している。

＜内藤委員＞

4ページに滞在支援と書かれているが、これは宿泊支援のことなのか、デイケア的な支援を含まれているのか。

＜堀岡委員＞

あえて、宿泊と日帰りを分けずに滞在支援とまとめた。センターがある以上は、ボランティア活動との連携という点からも、日帰りの支援を行うことになると考えているが、そういった活動についても行政として積極的な支援を行うべきかという点については迷いがある。

宿泊支援という形の滞在支援については、後の構想の部分でも説明するが、様々な行政からの支援をすべきと考えている。しかし、日帰り型の支援については、県に何か所も作れる施設ではないため、施設の近くに住んでいる母親は参加しやすく、遠い母親は参加しづらいという面が出てくる。

市町村でも日帰りサービスに熱心に取り組んでもらっており、その区別も難しくなるのではないか、ということもあって、ここでは滞在支援という言葉を使わせていただいた。

（4） 具体的な構想について

資料4により、堀岡委員から説明

＜白倉委員代理＞

県としても、市町村としても、こういった施設は必要だと思う。

施設整備については、イメージ案についても県主導と書かれているが、県が責任をもって整備をしてもらいたい。また、運営にあたっては、県と市町村が一体となって運営するということであるから、市町村だけではなく、県も応分の負担が必要ではないかと考える。昨今の財政状況も考慮するとこのような対応をお願いしたい。

＜山下委員＞
　現時点での考え方としては、施設整備については、県が一定の負担をしなければならないのではないかと考えている。運営については、説明資料にもあるように、小児救急といった県と市町村がタッグを組んで取り組んでいる事業を紹介させていただいたが、この事業では県も負担し、市町村も負担するという方式で実施している。このような事例を参考に検討していきたいと考えている。

＜小林委員＞
　大変のよいことだと思うが、小児救急については県内 2 か所あるが、この事業については、1 か所だと思うので、ぜひどこからも利用価値があるような場所を検討していただきたい。

＜藤巻委員＞
　今日、体験をお話いただいたお二人の母親の悩みは、出産してから退院して家に帰ってからのひと月からふた月の間のことだった思う。出生届は 2 週間以内に出す、それから里帰りをしたりして、サービスを受けられるのは、その後のひと月くらいたってからだと思う。それまで、なやんで、悲しんで、苦しんで、を経たころでないと、市町村に情報が行かない。今回、そういった部分に焦点を当て、子育てが楽しくなるように、このセンターがそういった機能を果たせるということになると、施設の整備や運営については、県や市町村が責任をもって支援を行っていただけるのであれば、実際に利用するという点が重要となる。
　母親に関わってきた助産師や保健師、看護師、地域の人達が、こういうセンターができて、こういう機能を担っているということを周知して、適切な人数に利用されていることが重要だと思う。いかに行政から支援を受けるのだとしても、利用するための仕組みをつくることが必要。
　今までイメージがなかったもの、求められていたけどなかったものが作られるので、どこでどんな情報を発信すれば、センターが必要な人に適切に利用されるかということを、保健師や看護師の研修会等を通じて、考えていきたいと思う。
　こういったセンターが作られるのは大変素晴らしいことだと思う。

＜内藤委員＞
　希望を言えば、甲府地区と富士東部地区に一か所ずつあるとうれしい。や

はり出産直後の赤ちゃんを連れて峠を越えるというのは、不安でもあるし、夫が勤めている場合に、宿泊している甲府市のセンターにこれるかというと、ちょっと難しいのではないかと思う。1つのセンターの規模は小さくても良いので2つあるとうれしい。

宿泊を求めない母親もいると思う。お昼を食べている間、そして欲を言えば少しお昼寝をしている間、子どもをみてもらって、夕方にはリフレッシュして帰る、そんな場所があると、自分としては、利用したいと思う。

＜山下委員＞

今日は、産後育児支援に関する提案ということで、こんな考え方もあるということでお聞きいただきたい。

場所については、先ほどから世田谷の事例を参考に出しているが、人口規模や出生数からその後の運営を考えた場合に、現状として県内に 2 か所作ることは困難だと思っている。

県が施設整備の補助を行い、県と市町村で運営費の助成をするといっても、民立民営で 2 か所作った場合にうまく回っていくのかということに不安がある。県の規模を考えた場合に厳しいのかなというのが率直なところ。

日帰り支援については、そういったサービスを提供することはあると思うが、身近なところにある施設を利用したいのだとすれば、利用者が限定されてしまう。そういったサービスは、身近なところ、市町村等で検討していただければと考えている。

＜山縣座長＞

子育て支援とは、いろんな角度、いろんな立場、いろんな状況に対して対応する中で、現状として宿泊支援がないという点がひとつのポイントだと思う。

また、いろいろな支援等があるなかで、ここを拠点に有機的に結び付けていく、そうすることによって県の役割、市町村の役割、民間の役割というものが見えてくる。

その時に問題となるのは、当事者が知らないこと。どこに助けを求めればいいのか、どこに言えばいいのか。それに対して、どこか一か所に行くと、どこに相談したらいいかというようなことをちゃんと教えてくれる、ということが重要。それがこのセンターであり、市町村の窓口であるが、それをいかにして当事者が知るかということ。

宿泊型については、必要性については認識は同じであるが、やってみなくてはわからない。運用がうまくいくかどうかもやってみなければわからない

という現実がある。やりながら、運用のやり方や連携の在り方を検討していくことになると思う。日本の中では先進的な取り組みを、市町村と県が連携してやっていくというのは、チャレンジングであると同時に、やらねばならないことでもある。

山梨県でのこの取組をうまくやっていくためのポイントがあれば、御意見をいただきたい。

＜市川委員＞

産前産後ケア協会はこういった事業をおこす場合のサポートを行っていきたいと考えている。

前回、世田谷の事例を紹介したが、はじめからうまくいっていたわけではなく、初年度は赤字で非常に苦労されていたことを知っている。今、事業が上向いてきたが、その理由としては、広報されてきたこと、つまり利用者の方がセンターに行くとこういうメリットがあるとわかってきたことで、有料でも利用したいと声が広がるようになった。

世田谷なので、セレブの人達が行く施設なの？と思われがちであるが、一方で、絶対に必要な方もいるので、区で 9 割の助成を行って、自己負担 1 割で利用しやすいような形にしている。

山梨県で行うという形は先進的な形で、紹介していただいた連合体という形は素晴らしいと思う。場所については、皆さんがアクセスしやすい場所という点も大事だが、ここにあるということが皆さん納得がいく所であることが一番重要なポイントではないかと思った。

まずは皆さんに知っていただく。そして、規模については、どのような人が支援に関わるかというリソースの問題や、どういったプログラムを展開するかということが大事であるので、そのあたりのコスト計算が一緒にできればいいのではないかと考えている。

いずれにしても、拠点ができることは安心感につながるので、手探りの部分もあると思うがまず始めていく。その中で、山梨県の助産師会の力は大きいと思うので、助産師会のパワーをどれだけ入れることができるか、関係者がどれだけ関わることができるかが重要となる。プログラムの中で、助産師が提供するプログラムだけではなく、母親たちが自ら作り上げるプログラムや愛育会の蓄積の中から提供されるプログラムなどをうまくつなげていく。そこで 1 つのモデルができると、そのモデルを各市町村でサテライト的に展開していくことができれば、より広がりが生まれると思う。

＜古屋委員＞

良い方向に検討が進んでいると思う。

保健所として感じるのは、広がっていくこと、プログラムが他でも活用できることが大切という話があった。保健所も、健康づくりとか母子保健とか食育とか、いろいろな広く健康づくり、地域の福祉との接点のような仕事を行っている。

最近ある市の保健計画の会議に出席したが、それぞれの部署がこれからの活動の方法ややりかについて悩みを抱えているのがよくわかる。その中で、保健所はこんなことを考えて、こうやっているとお話をすると、非常に反応してもらえる。その時だと、保育士の会や老人クラブの方、さらには市の福祉の担当者もいろいろと相談したいと言ってきた。

子育て支援は、社会の大きな問題ではあるけれども、直接支援する人は専門家で、関心をもっている人も多い。計画づくりとか、いろいろな場で、皆さんにお伝えしてく、広報係を担うのかと思う。出来るだけ協力したい。

＜堀岡委員＞

前回の資料には載せていたが、今回の検討やニーズ調査の結果等を普及啓発していく予算を組んでいる。具体的には、2 月か 3 月にイベントを行いたいと考えている。産後ケアを受けた有名人等を招いてパネルディスカッションに参加してもらうなど、お母さん方が来て、楽しいような会を行いたいと考えている。

そういったことを通じて、こんなことを山梨県は始めますよということをアナウンスしていきたい。その際には、ちびっこはうすさんとか、愛育会さんには御協力をお願いしたい。

＜内藤委員＞

前回、宮澤さんが出席された時に産前からつなげることが大切だと言っていて、自分もその通りだと感じている。生まれて初めて気がつくことは多い。頭ではわかっていても、目の前に赤ちゃんができて初めて実感する。産前からそういう情報があれば、何かがあった時に思い出して利用すると思う。

その周知の部分として、妊婦健診 14 回あると思うが、現在、産科はすごく混んでいて、なかなか産科の医師に質問できるような状況ではない。診てもらうのが精一杯で、いろいろなことを聞きたいけれど忙しそうで聞けないのではないか。

14 回のクーポンの最後の方に、産後ケアセンターのクーポンを入れておくことで、産後ケアセンターの存在を知るのではないか。無料は難しいにして

も、3 割引きとか。例えば、日帰りでランチが食べられるとか。そうすれば、クーポンを使うので、お母さん方はこういうのがあるんだということを知る。そういった周知の方法があると良いと思う。

＜堀岡委員＞

すごく面白い提案だと思う。参考視させていただくが、民立民営であれば事業者がどのように運営していくかということとも関連するかと思う。

前回、産前にみたこともない施設に、産んだ後に泊まりに行くというのは敷居が高いのではないか、という意見をいただき、そうかもしれないと感じた。しかしながら、世田谷でも産む前から宿泊支援を受けたいという希望もあると聞いているので、事業者に対しては、事前の見学ツアーみたいなものはやっていただきたいと考えていきたい。

＜山縣座長＞

この内容が具現化していく中で、広報の問題、やはり当事者が知るということが一番重要であるので、今のアイディアなども考慮していただきたい。

＜藤巻委員＞

今日、2 人の母親の体験を聞いて感じたことであるが、現在は市町村が妊娠された方に母子健康手帳を交付するという事業を行っている。日を決めて、時間をとって、本人と面接をして、母子健康手帳を交付するということを、どの市町村も行っているかと思う。その時に、どのようなことが伝えられているのか、ということを考えてみたい。

産後 5 日目で母乳が出ないという話をされていたが、まだ 5 日目では十分に母乳は出ない。本人は出るものだと思っていて知らなかった。

この事業が行われることは素晴らしいことであるが、もう一度、市町村が行っている母子保健事業の内容を、実施については、今日の資料にもあるようにずっとやってきているが、内容はどうなのか。

母親学級の受講率は低いのであるが、未受講者に対してどのようなアプローチしているのか、妊娠がわかってからの 7 ヶ月間に。この間に最低必要な知識、母乳がどうでるのかといったものを知ってもらう。

混合栄養のやり方も知らなかったと聞いた時には、保健指導を業とするものからすると、どこからやり直すべきなんだろうかと非常に反省をしている。

このようなことを考えると、母子健康手帳を交付する意味、手帳をはいっと渡すだけでなく、これから良い赤ちゃんを産んでね、育ててね、というスタートラインであるので、一人ひとりにあわせて、向き合えるような保健指

導をしていきたいと感じ、これから取り組んでいきたいと思う。

＜山縣座長＞

母子保健、周産期については様々な課題があり、ここは産後支援に関する検討が中心であるが、全体のなかでどのような位置づけであるかということが重要で、産前からのフォローも含め、これをきっかけとしてもう一度見直していくことも重要だと思う。

時間となったので議事を終了させていただきたい。

＜事務局＞

次回の会議については、今回までの議論をもとに、事務局で中間的なとりまとめ案を作成するので、これについて議論していただきたい。日程については、事前にお知らせしているとおり 12 月 25 日を予定しているが、おって連絡させていただく。